

博物館非公開エリアの公開について
—沖縄県立博物館・美術館のバックヤードツアーの現状と課題—

山本 正昭

About exhibition of museum nonpublic area

Masaaki YAMAMOTO

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第16号別刷

2023 年 3 月15日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.16
March, 2023

博物館非公開エリアの公開について —沖縄県立博物館・美術館のバックヤードツアーの現状と課題—

山本 正昭¹⁾

About exhibition of museum nonpublic area

Masaaki YAMAMOTO¹⁾

はじめに

平成19年に那覇市おもろまちにてリニューアル開館した当館(註1)は「博物館バックヤードツアー」を15年の長きにわたって継続的に開催してきた実績がある。当該催事は『沖縄県立博物館・美術館の設置及び管理に関する条例』の「管理 第1条」に明記されている「(博物館・美術館資料)を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い(後略)」に基づいて現在、月1回の頻度で当館の非公開エリアを広く公開していく内容となっている。

近年ではコロナ禍の影響を鑑みて、「博物館バックヤードツアー」の参加定員枠を縮小しながら行っているが、それでも毎回、定員を十分に満たすほどの参加が見られる。このようにコロナ禍以前と以後も変わらない人気を博している催事として当館では位置付けられていると共に、多くの来館者に対して博物館としての新たな魅力を提供している機会にもなっている。

しかし、意外にも展示に向けての作業場、そして博物館資料の管理場所とも言えるバックヤード、すなわち通常では非公開となるエリアを公開している沖縄県内の博物館は当館のほかでは1例しか無い(註2)。それ以外の博物館は所蔵資料の保管面、館内の防犯面そして安全面の配慮から一般に公開しておらず、バックヤードツアーを実施している博物館は全国的に見ても稀有な存在である。しかし、こ

の実施状況については当館が毎年刊行している『沖縄県立博物館・美術館年報』ならびに『博物館教育普及活動』(註3)で概略的にその内容について触れているものの、バックヤードツアーの詳細についてまとめられた報告はこれまで見らない。

よって、本稿では沖縄県立博物館・美術館におけるバックヤード公開の経緯と現状について詳しくまとめていくと共に、そこから見えてくる博物館としての役割、そして博物館学芸員の施設公開に対する意識からその課題にまで踏み込んでいきたい。

1. バックヤードツアーの現在に至るまでの経緯

財団法人日本博物館協会が平成24年に策定した『博物館の原則 博物館関係者の行動規範』には「博物館の原則」として10項目が掲げられており、この中で「博物館は、体系的にコレクションを形成し、良好な状態で次世代へ引き継ぐ。」と明記されている。一方で「展示や教育普及を通じ、新たな価値を創造する」とも記されている(註4)。前者は博物館所蔵資料の保存・管理について、後者は博物館における展示公開についてそれぞれ触れられており、これらの両立をどこまで図ることができるのかは博物館における大きな課題としている。よって、定期的でなく限定的な施設公開であっても、所蔵資料の保管と管理の面で非公開エリアまで一般来館者に公開することは設備的にも人員的にも充実していないことには博物館にとってその実施が困難であると言える。

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1. Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

この「博物館の原則」が提起される4年前の平成19年11月1日に沖縄県立博物館・美術館は開館しており、開館初年度から博物館の非公開エリアを一般向けに公開している。それまでの沖縄県立博物館(註5)では非公開エリアでの公開は実施されたことは無く、1970年代半ばまでは来館者に対して当館学芸員が収蔵資料を来館者に対して解説する機会もほとんど無かった(註6)。

80年代に入ってから公開エリアにおいて「収蔵品解説会」が文化講座の一環として不定期で行われるようになった。これにより学芸員が来館者に対して収蔵資料を説明する機会が増えるようになったものの、非公開エリアの公開まで実現する状況までには至っていない(沖縄県立博物館1996)。

平成19年に装いを新たに開館した沖縄県立博物館・美術館では「開かれた博物館」を標榜していたことから(沖縄県立博物館・美術館2008)、非公開エリアの一般公開はこのコンセプトに沿った形で「館内見学会」と銘打って、平成19年度の博物館催事に組み込まれることになった。

同館開館当初の館内見学会は隔月第4土曜日に実施され、何れも多く参加者が集まった(註7)。当時の参加した方々から、館内見学会の開催数を増やして欲しいという要望があったことを踏まえて、平成20年4月から毎月1回開催を基本に「バックヤードツアー」と銘打って定期的に開催するはこびとなった(沖縄県立博物館・美術館2008b)。

そして、バックヤードツアーとして開催した初年度の平成20年度は当館博物館学芸員が持ち回りで年1回の頻度で案内役として携わる形で、年間11回の実施に至っている。なお、平成20年度はとくに参加者定員は設定していない中で年間126名もの参加者があった。このことから1回あたり平均12名の参加者が集まったことを踏まえて、平成21年度以降からは1回あたりの参加者定員12名に設定して実施することとなった。

過去実施分における年間開催数と参加者数は別表にてまとめたが、平成25年度と令和2、3年度を除いて参加者は年間100名を超えていることから、1回あたりの参加者定員は概ね満たしていることになる。また、平成22年度は定員数を超過する開催回が多かったことから、臨時で定員者数を増やすという状況も見られた。

平成25年度からは毎月第3土曜日と開催日が固定化されて現在まで至っている。また、参加者定員に関しては令和2年4月23日から沖縄県内において新型コロナウイルス等対策特別措置法第32条に基づく緊急事態宣言の発令を受けて、令和2年5月開催分から通常定員数の半分に縮小して令和3年10月まで参加者数を6名に限定、その翌月から沖縄県内でのコロナ感染者数が減少したことより、定員数を通常の12名に戻して現在までに至っている(沖縄県立博物館・美術館2022)。

別表 沖縄県立博物館・美術館バックヤードツアーの開催状況

実施年度	年間実施回数	担当学芸員数	参加者総数	1回当たりの平均参加者数※小数点以下は切り捨て	備考
平成19(2007)年度	2回	—	—	—	「館内見学会」として開催。
平成20(2008)年度	11回	—	126人	11人	当年以降、「バックヤードツアー」として開催。
平成21(2009)年度	11回	—	147人	13人	
平成22(2010)年度	14回	—	168人	12人	
平成23(2011)年度	13回	—	138人	10人	
平成24(2012)年度	13回	—	142人	10人	
平成25(2013)年度	12回	12人	92人	7人	当年以降、毎月第3土曜日開催。
平成26(2014)年度	12回	12人	101人	8人	
平成27(2015)年度	12回	12人	112人	9人	
平成28(2016)年度	12回	12人	144人	12人	
平成29(2017)年度	12回	12人	132人	11人	
平成30(2018)年度	12回	12人	121人	10人	
平成31・令和元(2019)年度	11回	12人	120人	10人	コロナ禍により1回分休止。
令和2(2020)年度	7回	12人	44人	6人	コロナ禍により5回分休止。参加定員数縮小。
令和3(2021)年度	8回	12人	55人	7人	コロナ禍により4回分休止。参加定員数縮小。

注：『沖縄県立博物館・美術館年報』No.1～14を参照

2. バックヤードツアーの実施概要

バックヤードツアーは普段、完全非公開としている当館の作業エリアや博物館資料の保管・収蔵エリアを公開することで、博物館の役割とその背景を知ってもらおうと共に、一般来館者に対して沖縄県立博物館・美術館の有り様を展示以外の要素にも目を向けてもらうことを主旨としている。

また、このバックヤードは施設の紹介並びに収蔵資料の紹介以外に当館学芸員と観覧者が直接、質疑ができる数少ない機会となっていることから、複数回にわたって参加する観覧者も少なからず存在する。参加者の年齢制限はとくに設けていないが、小学生以下は保護者同伴としている。現在は電話での事前申し込み制としており、事前に当館のHPにてその申込日が告知される。参加希望者は参加者リストへの登録が前提となっており参加定員枠の人数が満たされた時点で受付を終了としている（註8）。

通常の開始時間は午後2時でバックヤード4～6カ所を案内役として当館学芸員1名のほか、誘導役として当館関係者計1名、計2名が随行していくのが基本となっている。開始前に参加者と事前受付で登録された参加者リストとの照合を行った後、開始時間にあわせて案内役の紹介と簡単なあいさつを5分前後行ってから、各場所を午後3時頃まで案内していく（写真1）。因みに防犯上の観点から非公開エリアにおける参加者の写真撮影は例外なく禁止している。

主な見学場所は学芸員室、特別展示室ならびに企画展示室のバックヤード、常設展示室バックヤード、トラックヤードを基本的に案内し、各分野の収蔵庫や特別収蔵庫（註9）、大型収蔵庫、冷凍庫、一時保管庫、工作室、撮影室など各学芸員の専門分野に沿った形で巡見していく（図1、2）。よって、見学コースが各学芸員によってそれぞれ異なるため、博物館学芸員の人数分、すなわち12のコースが設定されていることになる（写真2～6）。

見学するそれぞれの場所において参加者から質問を単発で受けることがあり、その都度時間にあわせて回答しているほか、分野によっては収蔵庫内の見学において、普段では触れることのできない所蔵資料に参加者が触れてみるといったハンズオン（写真7）の試みも行われている（註10）。そして、最後に質疑時間を5分から10分ほど設けて、まとめとしている。また、バックヤードツアーを担当する学芸員は基本的に常勤の学芸員に限っている。それは主に常勤の学芸員が各収蔵庫の管理担当となっていることに因る。

参加者からは、「展示室以外に展示のためのスペースが多く必要となることが分かった」、「展示していない収蔵資料が多くあることが分かった」といった博物館としての役割に繋がる感想が得られた以外に「学芸員の専門分野や仕事内容が良く理解できた」や「学芸員が展示内容だけでなく製作にも関わっているのが分かった」「学芸員の各分野によって資料の見方が違って面白かった」といった、博物館において学芸員がどのような役割を担っているのか、学芸員とはどのような業務に携わっているのか、といった学芸員という職種についての感想も多く見られた。



写真1 非公開エリア内での随行状況



写真2 学芸員室での説明状況



写真3 フィルム保管庫内での説明状況



写真4 大型収蔵庫内での説明状況



写真5 自然史収蔵庫内での見学状況



写真6 トラックヤードでの説明状況



写真7 ハンズオン体験

なお、参加者は学校が夏休み期間となる7、8月は親子連れや県外からの観光客が多く見られる傾向にある。また、令和2年度から令和3年度にかけては新型コロナウイルス感染拡大防止による都道府県外移動の自粛が影響してか、参加者は県内在住者にほぼ限られている現状にある（註11）。

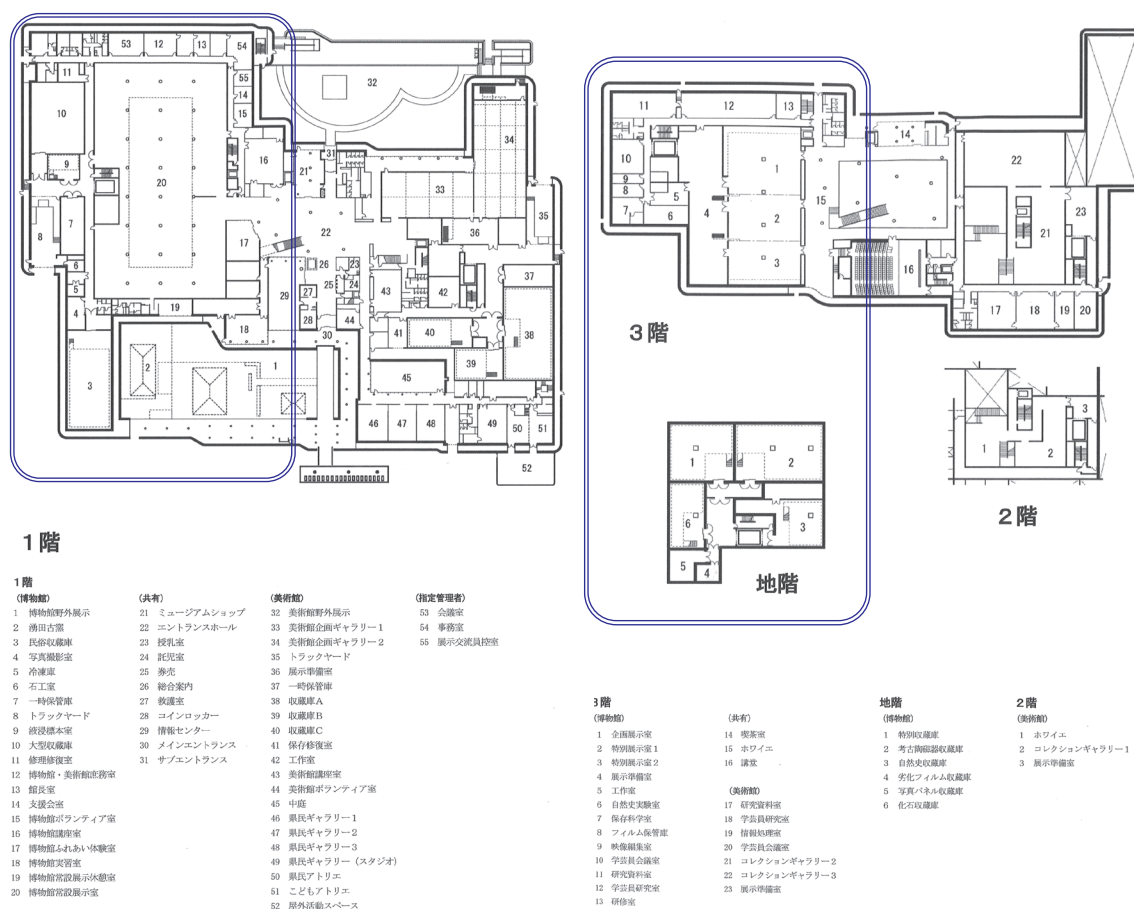


図1 沖縄県立博物館・美術館建物内全体平面図（枠内は下図範囲 沖縄県立博物館・美術館 2022）

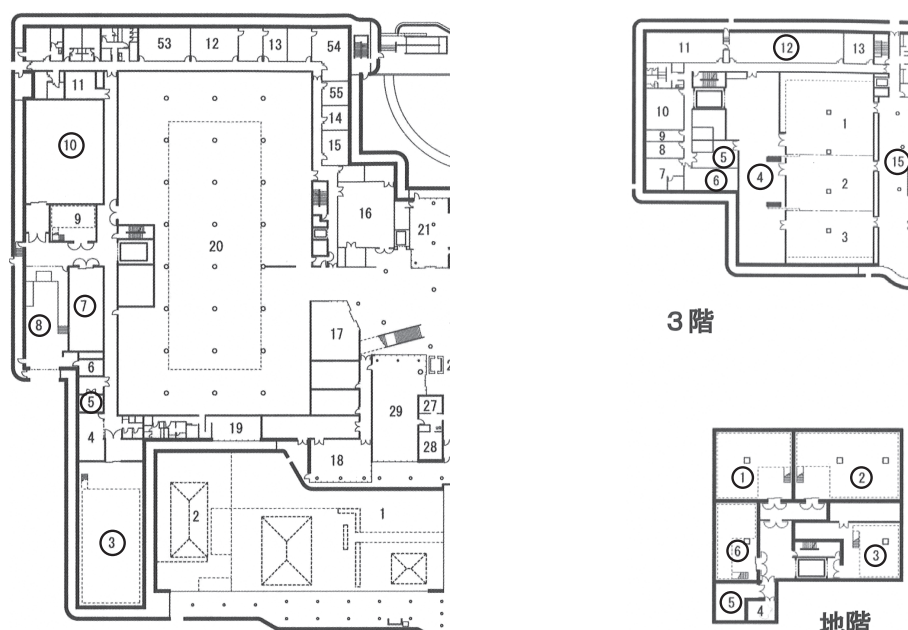


図2 博物館エリア平面図（数字の囲いはバックヤードツアーにて案内するエリア）

3. 案内する学芸員の意識

当館には令和3年度時点で12名の博物館学芸員が在籍している。そのうちの11名と、かつてバックヤードツアーで案内役を行ったことがある非常勤学芸員の2名、計13名を対象にバックヤードツアーに対するアンケート方式による意識調査を実施した（註12）。

内容は主に現在、実施されているバックヤードツアーの現状についてとその改善点について14の質問項目を設けて、各学芸員に回答を求めた（註13）。

まず、実施時間の60分、開催日時、開催頻度に関しては現状のままで良いとする意見が多く、年間2回以上の開催は少数にとどまった。また、案内する場所については同じ場所を毎回案内している学芸員と、毎回異なる場所を案内している、もしくは稀に異なる場所を案内している学芸員に分かれた。後者においては、案内する分野の理解をより促すことができる内容へと昇華させるといったことや、各学芸員が各年度で関連している企画展や催事にあわせて案内場所を変えているといったことが主な理由として挙げられる。

参加者からの質問については学芸員の各分野で異なっているため、ここでは詳細について取り上げないが、全体を通してバックヤードツアーが学芸員と観覧者が直接対話できる貴重な機会であることを質問内容から改めて感じることができた。

次に懸案事項としては、低年齢層の参加者への対応について触れたい。前章でも記したように参加者が小学生以下の場合には保護者同伴としているが、どうしてもその興味が様々な収蔵資料に目が移ってしまい、不用意にそれらを触れる恐れが生じてしまう。そのため、案内役と誘導役は常にその動向に注意を払う必要が出てくるといった留意が生じる。

他には参加定員以上の人数が集まる場合があり、定員から漏れてしまった観覧者に配慮して、実施回数を増やすなどの臨時的措置があっても良いのではといった回答も見られた。今回のアンケート回答には見られなかったが、博物館の収蔵庫内においては資料保存に努めることが必須であるが、そのためには外部から害虫の進入を阻止することや内部の温湿度の管理をして資料の劣化を防ぐといった「遮断」が保存環境づくりに求められる（佐野ほか2010）。

収蔵庫へ外部から不特定多数の進入があることから、少なからず収蔵資料に対しての影響があるものと思われる（註14）。この点におけるリスク管理についても検討していく必要があるものと筆者は捉えている。

そして、バックヤードツアーにおける今後の展開として、収蔵資料についてピンポイントでの解説を行うことや全分野の学芸員による案内、実際に普段の業務を見てもらうといった展開面における個性的な提案も見られた一方で、参加者からの質問や意見を集約してより内容の充実を図っていくべきであるといった現状におけるバックヤードツアーのあり方に対する提言も見られた（註15）。

以上のように当館の各学芸員がバックヤードツアーに対する意識や取り組み方の違いが見られたものの、今後もバックヤードツアーについては実施していくべきであるという意見は全学芸員の一致するところであった。

筆者が実際にバックヤードツアーを行った際には、その最後に自身が担当する企画展ならびに催事の告知を参加者に向けて行った。他の当館学芸員についても同様に告知を行っていることを聞き取りできたことから、観覧者に対して博物館の企画展並びに催事情報を提供できる貴重な機会であるという役割も担っていることを最後に付言しておく。

4. 博物館における非公開エリア公開の社会的評価

博物館の活動には資料の展示の他、展示に密接に関連した館外での教育プログラムの実施や学芸員による展示解説やギャラリートークを開催することで利用者が自発的に興味や関心を持ち、その背後にあるものについて理解を促すといった活動も含まれている（松岡2010）。しかし、これらの活動に関しては即時的な効果、そして数値的な成果として表面化されないことから、その社会的評価として可視化することは困難であり、かつ博物館活動における全体の中での評価についても杓子定規的に測ることができない要素を含んでいる。

更に近年において行政機関による博物館評価における大きな課題の一つとして評価手法が業績測定型評価ならびに事務的評価に偏っているという指摘（佐々木2022）があり、多分に博物館活動そのもの

の社会的評価が低いとする誤解を生むことへの警鐘を鳴らしている。この問題は「博物館における評価が指標の多くが数値目標に対する取り組みの評価になっている」（日本博物館協会2009）ということに対する懸念から、新たな博物館における評価を構築すべきであるという提言へと繋がっていく傾向にある。

確かに博物館における活動の多くは数値的目標では測ることのできない成果が多く存在し、また観光分野や教育分野など複合的な要望に博物館は対応を迫られる性質を有することから、従来までの枠組みから外れた取り組みをせざるを得ない場面が多く見られる。往々にして評価指標として表すことが難しい活動については等閑視される状況が明確に存在する。このことから、今回取り上げたバックヤードツアーに関しては定員数が限られていることで数値的上限が設定されている点や、数値的には示すことができない見学者の満足度向上を目的としている点で、行政的評価の対象から外れてくるとは言を俟たない。

あわせて、博物館は生涯教育の施設としての側面も有していることから、バックヤードツアーで得られた興味や関心が学習的効果そして、経済的効果としてすぐに表れてこないといったことから、行政的評価のみならず一般的な評価においても還元されることは難しい。

しかし、通常においては表には中々出てこない学芸員と対話する体験、並びに普段であれば近接できない博物館資料を間近で観察する体験、更に触れる体験、博物館展示の背景を知って深い学びへと誘われる体験は参加者にとって特別な体験を享受することであり、その意味においてバックヤードツアーは何物にも代えがたい体験が得られる稀な機会であると言える。この体験をより効果的に博物館活動へと繋げていくために各分野の学芸員による創意工夫がバックヤードツアーを通して行われているのは先述したとおりであるが、この点において評価されるべき内容を孕んでいると評価しても言い過ぎでないように思われる。

博物館における社会的価値に対応する評価として2つのアクションが提示されている。その一つに「使命の見直しと再構築」が挙げられている（佐々

木2022）。これは新たに期待されるアウトカムを追加する場合、使命をどのように修正して、どのように具体的な事業を追加し、修正すべきかを確認するということである。この点を踏まえてみると、バックヤードツアーを目的に向けてより良い内容へ向かわせるための試行錯誤が各学芸員で行われていることが、「使命の見直しと再構築」への取り組みへ還元されていると見ることができる（註16）。

加えて、評価というものはその事業のアウトカム（＝めざす価値）をより効果的に達成するための手段であり、評価を行う前に「どのような価値を生み出そうとしているのか」についての議論がまずは必要となってくるという提言（源2022）がある。このように、バックヤードツアーで得られた参加者からの感想や案内役としての学芸員の実感を集約させ、その価値がどのような点において存在しているのかを論拠にして議論へと展開させていくことが、新たな価値を生み出す下地となる。そこからまた新たな社会的評価へと結びいて、バックヤードツアーの形を再度模索していくといった好循環を生み出す土壌をつくっていくことが肝要に思われる。

5. まとめ—非公開エリア公開の意義とは—

沖縄県内に所在する博物館ならびに博物館相当施設にて非公開エリアを一般向けに公開している施設は当館以外に沖縄美ら海水族館が『裏側まるごとウォッチング』と題して、有料で非公開エリアである大水槽の上面の公開を実施していた事例がある（註17）。この非公開エリアの公開についても参加者からの強い要望があったことと、入館者の満足度向上を目的に実施回数を増やし、夏休みなどの繁忙期には1日あたり7回も実施していた実績がある（註18）。しかし、令和4年1月7日から新型コロナウイルス感染拡大防止により、同催事は休止している状況にあることから、現段階では沖縄県内でバックヤードツアーを実施しているのは当館のみとなっている（註19）。

先述したように沖縄県立博物館・美術館でも緊急事態宣言の発令に伴ってバックヤードツアーを近年、休止することが多かったことから（別表）、皮肉にもその意義について考える機会が多分にあった。その中で観覧者にとって博物館は展示物だけで

はなく、展示に係わっている「人」にも興味、関心を抱いていることに気付かされる部分はおおいにあった。バックヤードツアーの参加者たちは博物館の裏側を見聞することで展示に関わる人の実態を認識し、常設展示や企画展示へフィードバックしていくといった形で展示の奥行き感を楽しんでいるように思われた。また、案内する学芸員にとっても観覧者が希求している内容を汲み取る機会として捉えていることから、バックヤードツアーは学芸員と観覧者とのコミュニケーションツールとして機能していることを強く感じた。

以上からコロナ禍を乗り越えて以降の将来において、当館におけるバックヤードツアーの意義は益々高まっていくものと推察される。それにあわせて、学芸員と観覧者との関係性を捕捉していく上での新たな指標となっていくと共に博物館における新たな評価基準を提示できる内容になってくるものと期待される。

依然として、博物館において非公開エリアを公開することへのハードルが高いことは言わずもがなであるが、今回取り上げたバックヤードツアーのように非公開エリアの観覧者への公開という機会は魅力あるコンテンツへと転換できる可能性を秘めていることは疑う余地は無い。

【註釈】

(註1) 以下、本稿では「博物館」と表記する。

(註2) 本稿における沖縄県内の博物館は登録博物館に限るものとする。

(註3) 『沖縄県立博物館・美術館年報』と『博物館教育普及活動』は共に開館年の次年度より、刊行しており、令和4年3月で前者はNo.14、後者は15冊目を数える。両誌共、当該年度に実施したバックヤードツアーについての開催日、案内講師名、参加人数、参加定員数について記している。

(註4) 『博物館の原則 博物館関係者の行動規範』の全文については<https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/2012.7koudoukihan.pdf>にて公開されている。

(註5) 沖縄県立博物館は平成17年度まで那覇市首里大中町1-1に所在していた博物館で、現在の

の沖縄県立博物館・美術館の前身となる博物館である。

(註6) 沖縄県立博物館開館30周年の記念誌にある「6. 展望」には普及活動についての項目があり、その中には「3. 講演会、講習会、文化講座を定期的に催す」とあることから（沖縄県立博物館1976）、臨時的に学芸員による収蔵資料の解説を行っていた可能性がある。

(註7) 当時、沖縄県立博物館・美術館設立に携わった園原謙氏のご教示によると、九州国立博物館で行われている展示手法を博物館設立の際に参考としており、その際に同館にてバックヤードツアーが実施されていたことから、沖縄県立博物館・美術館においても同様の催事を設定したと推測されるとしている。

(註8) 令和4年8月現在。令和元年度までは一般来館者に対して開始30分前に館内アナウンスにて、参加集合場所を案内して、参加を促していた。

(註9) 令和3年3月時点で沖縄県立博物館・美術館が所蔵している博物館資料は10,488点を数える（沖縄県立博物館・美術館2021b）。そのうちの9割以上が各分野別に収蔵庫にて保管されている。

(註10) バックヤードツアーのハンズオンは考古分野で沖縄県内の遺跡から出土した石器、陶磁器や自然史分野で沖縄県内にて採集した石材標本を対象におこなっている。これらハンズオンで利用される資料は何れも耐久性がある資料を対象としており、実物に触れることで新たな学びへと昇華していくという主旨で各分野の学芸員が状況を見て実施している。

(註11) 沖縄県立博物館・美術館では令和3年度においては5月から9月にかけて沖縄県内で緊急事態宣言が発令されていたことによって約4か月間の臨時休館措置が取られた。それにあわせてその間はバックヤードツアーについても休止となった。

(註12) バックヤードツアーは主に施設紹介になりがちであるが、収蔵庫にある資料を使っただけの解説や資料のハンズオンを行い、博物館が所蔵する資料そのものに興味を持つ切っ掛けづくり

をしている学芸員も多く見られた。

(註13) このアンケートは令和4年1月17日に実施し、同年1月31日に回収した。

(註14) 観覧者の呼気、汗から発生するアンモニアや臭気などのガスや、衣服や靴底などに付着した塵埃などが収蔵庫内に持ち込まれることで、収蔵資料に悪影響を及ぼす要因となる(佐野2010)。

(註15) 博物館の来館者に対して対面式で様々な質問をして意向を調査、分析する「来館者調査」の有効性が説かれている(小林2009)。博物館の改善計画を作成、実行する上でこの来館者調査で得られた情報は独善的な改善計画に陥らないための根拠資料となる。バックヤードツアーでは学芸員と来館者との直接対話がとりやすいことから、来館者調査を行う上での条件が整っていると言える。今後の展望として両者をセットで実践することで、来館者からの有益な意向を引き出すことができるものと思われる。

(註16) 現状において沖縄県立博物館・美術館ではバックヤードツアーに対する意見集約の場が設定されておらず、その経験則は各学芸員によって蓄積されている。

(註17) 1回あたり参加者定員は5名で、とくに年齢制限は設けていない。飼育員1名が約60分、世界最大級と言われている容積7500m³の大水槽上(中村、池田2014)の施設案内や、大水槽内で飼育されている生物の飼育方法について解説する形式をとっていた。毎日開催し、特に夏休みなどの繁忙期には実施回数を増やして行っていた。

(註18) 沖縄美ら海水族館の比嘉亘氏のご教示による。

(註19) 令和4年12月時点においては新型コロナ感染拡大防止のため、バックヤードツアーをはじめとする沖縄県立博物館・美術館主催催事は全て、感染症対策を十分に行った上で実施している。

【参考文献】

沖縄県立博物館1976『沖縄県立博物館 30周年記念誌』

沖縄県立博物館1996『沖縄県立博物館50年史』

沖縄県立博物館・美術館2008a『平成19年度 博物館教育普及活動』

沖縄県立博物館・美術館2008b『沖縄県立博物館・美術館年報』No.1

日本博物館協会2009『博物館評価制度等の構築に関する調査研究報告書』

小林克2009『新博物館学－これからの博物館経営－』同成社

佐野千絵、呂俊珉、吉田直人、三浦定俊2010『博物館資料保存村－文化財と空気汚染－』みみずく舎

中村浩、池田榮史2014『ぶらりあるき沖縄・奄美の博物館』芙蓉書房出版

吉富友恭2010「博物館教育論」『展示論－博物館の展示をつくる－』日本展示学会

松岡敬二2010「展示から広がる活動」『展示論－博物館の展示をつくる－』日本展示学会

沖縄県立博物館・美術館2019『開館10周年記念誌－10年の歩み－』

沖縄県立博物館・美術館2021a『沖縄県立博物館・美術館年報』No.14

沖縄県立博物館・美術館2021b『博物館企画展 新収蔵品展－令和2年度収蔵資料－』

源由理子2022「『評価』の社会的役割を再考する」『博物館研究』No.645 公益財団法人 日本博物館協会

佐々木亨2022「結果・成果の検証から、創造的な評価に向けて」『博物館研究』No.645 公益財団法人 日本博物館協会

沖縄県立博物館・美術館2022『令和3年度 博物館教育普及活動』

山本正昭2022「沖縄県立博物館・美術館のバックヤードツアー」『博物館のコレクション管理論』雄山閣
<https://photos.app.goo.gl/aZ73uDMrkqh3z8rK6>

謝辞

2022年7月に雄山閣から刊行された『博物館のコレクション管理論』にて沖縄県立博物館・美術館が現在、実施しているバックヤードツアーについての現状をコラム形式でまとめるという機会を2021年4月に賜った。このことを契機に、博物館に見る非公開エリアの在り方についての考えを整理していくに至り、上掲書のコラム原稿を脱稿した後にこれま

でのバックヤードツアーの実施経過と現状における課題を追加してまとめたのが本稿である。本稿を草するにあたって切っ掛けをつくっていただいた金山喜明氏（法政大学キャリアデザイン学部）並びに桑門智亜紀（雄山閣編集部）、バックヤードツアーに関するアンケートにご協力いただいた沖縄県立博物館・美術館の博物館班学芸員の皆様や、同アンケートに回答していただいた一般観覧者の方々には末文ながら厚く感謝申し上げます。

他、本稿にて情報提供していただいた方々には、下記のご芳名を記すことで感謝の意といたします。
協力者（敬称略）

片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）、阿利よし乃（沖縄国際大学総合文化学部）、平川信幸（沖縄県教育庁文化財課）、久部良良子（沖縄県平和祈念資料館）比嘉亘（沖縄美ら海水族館）